

奉 安 庫 - そ の 後 -

学院史編集室長 井 上 琢 智

8月になると恒例のようにマスコミが取りあげるテーマに第二次大戦に纏わる話題があります。それが薄れゆく戦争への記憶と非線・反戦への誓いを確かめるほとんど唯一の機会になっているように思えます。関西学院に残る戦争遺跡を前号本紙で紹介したところ、この時期に合わせて、『神戸新聞』（8月13日）が「奉安庫―関西学院大―」（「戦跡は語る―終戦 65 年―」）を取り上げられました。さらに『朝日新聞』（9月21日）は、耐震改修中に発見された奉安庫について「壁を壊したら『奉安庫』GHQから隠す？阪大・豊中」の記事を取り上げました。その記事によれば「建築物に埋め込まれた奉安庫を動かすのは大変なので、手前に壁を作り、GHQから隠したのではないか」、「旧制高校<旧制浪速高校は戦後の学制改革で阪大に包括された>や帝国大学は行政や軍とかかわって、戦争を積極的に支える役割を担っていたため、GHQの捜査を受けまいと過剰反応して隠したのではないか」という。本学の奉安庫もまた、「手前に壁を作ることはなかったが、その前に書架を置くなどして、今日まで目に触れないようにしていました（写真左）。



教育勅語やご真影の研究は、それなりの蓄積がありますが、それに比べて奉安殿・奉安庫については、未だ研究途上にあると思われまふ。これまでの研究―ただし、キリスト教主義学校に限定すると―は、奉安庫・奉安殿の建設事情、その建設・設置時期、さらには奉安殿の建築様式については明らかにされつつあります。その研究の一つに、神戸女学院を事例とした真栄平房昭「戦時下における国家主義と『ご真影』―神戸女学院の事例から―」や川島智生「神戸女学院『御真影奉安殿』の建築位相」（神戸女学院史料室『学院史料』vol. 22, 2008. 6）があります。

これらの研究を踏まえた上で、関西学院の事例をもう一度考えたいと思います。関西学院と神戸女学院を比較すると、前者は奉安庫であるのに対して、後者は奉安殿ですが、ともにその設置時期は、1937年で、それはおそらく「この問題について他のキリスト教主義学校の校長とも相談の結果」であると思われまふ（『神戸女学院百年史 総説』222頁）。もっともここで指摘されているキリスト教主義学校に、神戸女学院の他に関西学院や神戸女子神学校、ランバス女学院などが含まれていることを示す史料・資料は見つかっていませんが、おそらく三校の交流状況や位置関係などを考えると、その可能性は十分あるように思えます。ただ、なぜ関西学院の場合に奉安殿でなく、奉安庫であり、神戸女学院がその逆であったかを示す史料・資料も調査中ですし、神戸女子神学校、聖和女学院については、その存在を示す記述はいまなお発見できていません。このように三校に限っても、奉安殿・奉安庫の客観的史・資料にもとづく研究は緒についたばかりだといえます。

奉安殿・奉安庫の役割について川島は「1935（昭和10）年に起きた国体明徴運動〔の中で〕…奉安殿建設はなかば義務化され…奉安殿が単なる収蔵庫から、最敬礼の対象としてふさわしい建築であることが求められるようにな〔った〕」（58）と指摘しています。この指摘は、奉安殿・奉安庫が「最敬礼の対象」となった場合、その「建築様式」だけでなく、その奉安殿・奉安庫の位置関係を考える必要があることを意味します。この視点は、これまでそれほど問題にされてこなかったように思います。それに気づかされたのは『図録 関西学院100年』に掲載された二枚の写真（次頁）でした。通常、関西学院での中央芝生での行事は、当時図書館であった時計台に向けて、すなわち学生は東を背にして西を向いて整列することになっています（写真左）。しかし、「宮城遙拝」を記録した右側の写真は、それとは逆に正門を向いて、すなわち学生と教員もともに西を背に東を向いて整列しています（写真に写る3名の教師のうち一人は吉岡美国<右>であり、もう一人はベーツ院長<中央>だと思われまふ）。

これを念頭に関西学院の奉安庫の向きを見てみましょう。奉安庫は西を向いており、従って御真影は東を背にして西を向いています。宮城遙拝をする際（奉安庫の扉が開かれていたかどうかを示す証拠はありませんが）、

教師・学生は御真影を正面に、東を向いて遙拝することになります。それによって宮城がある東京に向かって遙拝することになると考えられます。



【時計台に向かって行われていた通常の学院行事】



【時計台を背に宮城遙拝】

この視点から神戸女学院の奉安殿の向きを考えてみましょう。ヴォーリズ的设计による神戸女学院の奉安殿は「ソールチャペルの入口前の西側、渡り廊下の南側の位置」にて建てられていました。神戸女学院の奉安殿は現存していないので、右の写真（神戸女学院院長室所蔵）からその方向を推定するしかありません。写真を参照しながら現地を訪ねたところ、おそらくその扉は東を向いて開き（扉の上を飾った「ペディメント」は偶然だと思われるが、現在も東向きに置かれています）、それゆえ御真影は西を背にして東を向いています。奉安殿の向きは関西学院の奉安庫と逆になります。しかし、注目すべきは、この奉安殿とソールチャペルとの位置関係にあると思われます。もしも教員・学生がチャペルに入ろうとすると、西側（左手）に奉安殿があり、御真影が礼拝者を監視する形になり、礼拝者に「緊張感」「無言の威圧」(37)を与えていたとも考えられます。関西学院の場合、日常の礼拝は各学部のチャペルで行われていましたので、教員・学生はそのような「緊張感」や「無言の威圧」を直接感じなかったと思われます。



【神戸女学院 奉安殿】

このような視点が、奉安殿・奉安庫研究にとってどのような意味を持ち得るのか判断できませんが、関西学院が「保存」していた奉安庫と宮城遙拝の写真が示す新たな分析視点であることは疑いないように思えます。もっとも今後この奉安庫・奉安殿研究を進めるためには、奉安殿・奉安庫の設計図、設置時期、廃止指令とその対応などを示す基本的史料・資料の発掘が不可欠であることは間違いありません。

いずれにせよ、1945年12月15日、GHQの神道指令により「御真影奉安殿」は廃止されました。

神戸女学院の調査に際しては同史料室の佐伯裕加恵さんの、そして写真の借用については図書館の阪上澄子さんの、そして院長室の井出敦子さんのお世話になりました。記して御礼を申し上げます。

また、最初の写真は、竹本洋経済学部教授の撮影によるものです。その利用をお許しいただいた同氏とモデルを務められた田中敦経済学部教授に御礼申し上げます。

【訂正】

前号（No. 31）掲載の写真について、「海軍予備学校の教育の場」と説明しましたが、正しくは「海軍甲種飛行予科練習生の教育の場として、当初三重海軍航空隊西宮分遣隊（後に西宮海軍航空隊となる）に貸与された」でした。お詫びし、訂正させていただきます。誤りをご指摘いただいた木村昭氏（旧中昭20、経済昭25）に深く御礼申し上げます。